

組織病理カラーアトラス 第2版

坂本穆彦, 北川昌伸, 菅野 純(著)

京都府立医大教授・分子病態病理学

伊東恭子

病理学教育への情熱が結集された
優れたカラーアトラス

病理学とは、①病気の原因を探り、②生体内に生じる病態の実情を究明し、③そのことを通じて病気の診断、さらに治療・予防に寄与することを目的とする学問分野である(p.2)。病理学の壮大なミッションが三か条にして冒頭に提示されている。

さて、Rudolf Virchowによって提唱された細胞病理学 Cellular Pathologie の概念は、近代医学の中で病理学の地歩を築き上げる上で著しい貢献をしたことは言を俟たないが、今や遺伝医学・分子生物学の長足の進歩を反映して、分子の言葉で病気が語られる新しい時代を迎えている。しかしながら、今日にあっても病理学の基本は、光学顕微鏡レベルでの形態学に基づいた病変の理解や診断にある。

本書においては、病理学の総論を構成する、代謝障害、循環障害、炎症、腫瘍、先天異常という概念をまず、顕微鏡写真や模式図を駆使して解説した上で、循環器から始まり骨・軟部に至る各臓器・系の疾患を取り上げ、個々具体的に詳説するという構成となっている。序において著者が述べられているように、まさに「病理学を総論と各論に分け、双方をたえず行き来しながら個々の病態・疾患の理解を深めていけるように構成されている」。これは医学を学ぶ学生にとって、病理学の理解を円滑にする工夫として必ずや歓迎されるに違いない。従来類書では、ともすれば個々の疾患の組織像を提示することに力点が置かれ、病理学の大きな体系の中での個々の疾患の位置付けについてはさほど配慮されていなかったように思われる。それに比し本書は常に俯瞰の視点を失うことなく、病理学を学べるように気配りがなされていると言ってよい。

本書を通読すると、随所に読者の理解を助けたリ、さらなる関心・興味を高めたりする工夫がな

されていることに気付かされる。読者の理解を助ける工夫としては、模式図や簡潔な構成から成る表に加え、小さなサイズの写真中で囲み領域を示したすぐ横に、それと全く同一の視野を大きいサイズの写真で提示するというものを挙げることができる。初学者に限らず読者が形態学を理解する際に遭遇する困難の一つが、説明文中に記載されている変化(病変)が顕微鏡写真中の一体どこに対応するのか把握できないことにある。その意味でこのような工夫は図中の矢印と同様、読者の理解に資することは間違いない。また、各論の中には「基本構造のチェック」という項目が設けられていて、これは既に生理学や組織学で読者が学習した内容を、しばし立ち止まって復習する上で効果を発揮すると考える。正常構造の理解なくして病理組織学的変化の正確な理解はあり得ないからである。読者の関心・興味を高める工夫としては、「MEMO」や「*」として、最近のトピック(例えば放射線誘発小児甲状腺癌)や英語の語義への言及がなされていることを挙げることができる。また、各論中の各疾患ごとの説明文には「病理診断のポイント」が箇条書きで整理されていて、医学生のみならず、病理医をめざす人々にとってもその知識を整理する上で有用と思われる。

以上のように本書は、著者の長年にわたる病理学教育への情熱が結集された、優れたカラーアトラスとして、医学生のみならず、ヒトの病理組織学を学びたいという志を持つ方々に強く推薦する。



●B5/頁 416/2015 年
定価：本体 10,000 円 + 税
[ISBN978-4-260-02143-2]
医学書院 刊